

千里ニュータウン情報館「ニュータウンを読む」展
関連オンラインセミナー

「発掘！私がオススメのニュータウン本大会」第1回

2023年3月8日(水)19:30-21:00

お話:

岡絵理子さん(関西大学環境都市工学部教授)

仙仁徑さん(パルテノン多摩学芸員)

曾谷博之さん(吹田市立千里ニュータウン情報館)

田中直之さん(豊中市千里文化センター「コラボ」センター長)

進行:奥居武(千里パブリックデザイン)

※肩書はイベント開催時点

奥居(進行)

進行を務めますのは、千里ニュータウンで育って来年で60年になります、千里パブリックデザインの奥居と申します。よろしく願いいたします。

それではさっそく、きょう読む資料を4名の方から紹介いただきます。

50音順に、最初は岡絵理子さん。関西大学環境都市工学部教授で住まいと都市環境がご専門。千里ニュータウンをフィールドにさまざまな研究をしてらっしゃいます。

2人目は、仙仁徑さん。日本最大級のニュータウン、東京・多摩ニュータウンの文化拠点である「パルテノン多摩」で学芸員をしてらっしゃいます。2018年には、千里ニュータウンとの共同展示をしていただきました。千里にも何度も来ていただいています。ご専門は植物学ですが、ニュータウン全般についても歴史や都市計画、公園のトイレに至るまで詳しく調べてらっしゃいますので、楽しい話を伺えると思います。

3人目は、曾谷博之さん。ご自身も千里ニュータウン育ちで、吹田市職員で千里ニュータウン情報館にお勤めということで、千里の昔も今も、表も裏も全部ご存知の地域住民であり、吹田市職員という方。幅広いお話を伺えると思います。

最後の4人目は、田中直之さん。千里ニュータウンは吹田市と豊中市にまたがっていますが、豊中市側にある千里中央の千里文化センターのセンター長でいらっしゃいます。千里のど真ん中。今の動きの真ん中におられますので、いろんなことをご紹介していただけると思います。以上、よろしく願いいたします。

パネラーからの資料紹介

奥居

きょうはこの豪華メンバーで、「読むもの」を切り口に千里ニュータウンやニュータウン全般を多彩に切り取っていきたく目論んでいます。ご紹介いただくのは、ニュータウンに関する「読むもの」…本もありますし、本以外もあります。ごゆっくりお楽しみください。

順番はご紹介いただく内容から、トップバッターに曾谷さん、2番目に仙仁さん、3番目に岡さん、トリを田中さんという順番で進めてまいります。

曾谷

千里ニュータウン情報館の曾谷です。私が紹介するのは、大阪府の千里センターが出した『千里の歴史と伝統』全3巻です。千里ニュータウンは大阪府が造ったんですが、千里センターは町が出来たあと、開発者の大阪府を助けるような補完的な役割をしてきました。「千里開発センター」という名前前で1962年（昭和37年）に始まり、1973年（昭和48年）に名前と組織が変わり「千里センター」に。2005年（平成17年）までありました。今もその後身となる組織がありますが、この3冊の本は、千里センターの時代に発行されています。

●『千里の歴史と伝統』
千里20年まつり実行委員会
1982（他全3冊）
→ 曾谷博之さんからのご紹介

その千里センターが出していた新聞『千里』というフリーペーパーがありました。行政が頑張っていて、大阪府自体が新聞を出していた。1964年（昭和39年）から2005年（平成17年）までなんと41年間、通巻で492号まで出ていました。中身は、住民への生活の利便情報やまちづくりの情報、府や千里センターからのお知らせなどで構成されていましたが、残念ながら2005年（平成17年）に千里センターの解散とともに廃刊となりました。

『千里の歴史と伝統』の本は、そもそもこの新聞の連載記事から成立しています。新聞「千里」の1980年（昭和55年）から161回にわたって連載されたものをまとめたのが『千里の歴史と伝統』です。

第1巻は1982年（昭和57年）、「千里20年」を記念して出され、以後、千里センターの特別な節目ごとに発行されました。内容は、千里丘陵に伝わる伝説や歴史、ニュータウン建設当時のエピソードなど、全20話で構成されています。

『続 千里の歴史と伝統 近郊編』は1986年（昭和61年）、国際グリーンフォーラム開催を記念して出されました。内容は、千里丘陵の伝説や歴史、建設当時のエピソードや歳時記などで構成され、全26話。3巻目の『千里の歴史と伝統Ⅲ 続近郊編』は1992年（平成元年）、「千里30年」を記念して出されました。内容は、千里ニュータウンに限らず北摂全体に広がるようなお話。充実の中身で、全31話入っています。

著者は、北田順三さん。1970年の大阪万博のあたりから7年間ぐらい新千里西町にお住まいになっていた。ご存じの方も多いと思いますが、当時、新聞「千里」の編集にも関わり、161回の連載をこなされた方です。

私が感じた全3巻の特徴は、自分で町を歩いて感じたことを、すごくわかりやすい文章で書かれているなあと。

町の発展とともに残念ながら消えていくような事柄もいろいろ記録されています。後書きもいい感じに書かれていて、なくなった方々、ニュータウンの歴史を調べた方のお名前など、横つながりのエピソードも出てきます。当時の千里センターで協力してくれた職員へのお礼の言葉も名前付きで入っていて、ほのぼのします。

奥居

ありがとうございました。また後ほど続きのお話を伺いたいと思います。続いては、多摩

ニュータウンから仙仁さんよろしくお願ひします。

仙仁

パルテノン多摩学芸員の仙仁です。よろしくお願ひします。私のオススメは、絵本『やとのいえ』です。「やと（谷戸）」という言葉は関東ではご存じの方が多いと思いますが、関東以外だとあまり聞き慣れない言葉だと思います。「やと」は主に関東地方で使われる言葉で、丘陵で見られる細長くて浅い谷のことを言います。関東では「やと」が一般的ですが、千葉のあたりでは「やつ（谷津）」という言い方をすることがあります。

●『やとのいえ』八尾慶次
偕成社 2020
→ 仙仁径さんからのご紹介

その「やと」を舞台にした「やとのいえ」は、八尾慶次さんが作者で2020年に偕成社から出ました。八尾さんのお生まれは神奈川県相模原市の橋本で、多摩丘陵のそばですが、今は関西にお住まいです。偕成社は『はらぺこあおむし』とか子どもの本をいっぱい出されている出版社ですね。

この本の内容は多摩丘陵の「やと」をモデルにして、そこに建つ一軒の農家とその土地に暮らす人々の様子を道端に作られた十六羅漢さんとともに1868年（明治元年）から現在までを定点観測的に見ていきます。多摩丘陵は東京都から神奈川県にまたがってある丘陵地帯です。構成は左ページに十六羅漢さん、右ページに「やと」の風景が描かれています。ページをめぐるごとに時代が進んでいきますが、それとともに季節が進むように構成されていて、150年で1年の四季をめぐるようなかたちになっています。左ページには十六羅漢さんのところに文章があり、十六羅漢の視点で地域の変化を見守っている文章になっています。

これは私が監修をしております。私は自然担当で、「やとのいえ」に描かれている自然の部分を見てほしいと頼まれましたが、暮らしぶりも描かれるので広く監修させてもらいました。

オススメの理由1は、正面からニュータウンが取り上げられています。イラストでニュータウンがどんと描かれています。見る人が見ると、「あの場所か」とわかってしまうような場所ですね。

オススメの理由2は、ニュータウンの前にも土地には歴史があったというのがよくわかる本です。150年の歴史を描いているので当然といえば当然なんですが、博物館に来る方のアンケートに「ニュータウンの前に人の暮らしがあったことを知らなかった」という方がけっこういらっしゃるんですね。ニュータウンができる前がどんな暮らしだったかがよくわかって、すごくいいなと思いました。

オススメの理由3。ニュータウンが登場しますが、ニュータウンを悪者として描いてない。十六羅漢さんがフラットな視点でその時々のことを文章にしてるんですね。のどかな里を開発して、町が作られると悪者にされがちですが、そういうところがないのもいいなと思いました。

オススメの理由4。絵本なんですが、後ろのほうにかなりの分量を割いて詳しい解説が付いています。編集者もすごく頑張ってください、いろいろ調べられてるんですね。私も参考になる図書をいろいろ提供しています。子どもだけじゃなく、大人も十分楽しめる内容になっています。

オススメの理由5。絵が緻密で美しいです。こういうタッチで描いてもらって、すごく良

かったなと思います。絵の力があって、写真に残せない時代、なかなか残らない時代がリアルに描かれてるんですよ。子どもたちにとっても、昔をリアルに感じられて良いなと思いました。

オススメの理由 6。物語に普遍性があります。大都市近郊の郊外のだかな里山にニュータウンができて大きく町が変わっていくところを描いてますが、そういうことって日本各地にありますし、極端なことをいえば世界中至るところにあるんですね。そういうところに暮らす人たちみんなに響くところがある。

私に関わる前に描かれたラフスケッチをお見せします。気づいた方いらっしゃるでしょうか。せんちゅう、千里中央をイメージした現代の様子なんですね。いろいろと経緯があって結局、千里ニュータウンではなくて多摩ニュータウンがモデルになってしまった。役を奪って申し訳ないと思うところですけども。その意味でも、千里ニュータウンの方が読んでも、自分事に引き付けて見ることができる本です。

ということで『やとのいえ』は、ニュータウン人にとってマストバイだと言えらると思います。ありがとうございました。

奥居

ありがとうございました。それでは3人目は岡先生、よろしくお願いします。

岡

関西大学の岡です。私の本棚には千里ニュータウンの本がたくさんにあります。その中から何か選ぶかとも思ったのですが、このイベントのチラシを見るとそこには本棚にある本がたくさん並んでいました。同じ研究室で論文を書かれていた山本茂さんの本もそうです。『ニュータウン再生—住環境マネジメントの課題と展望』という本がそうなのですが、奥居さんから自分の本でもいいよと言われたので、それならと出してきたのが、『和室学』という本です。

なぜ『和室学』で千里ニュータウンなのかと言いますと、私が担当しているのは、和室学の中でも最後のほうの章で、郊外戸建住宅地や団地などの集合住宅の中で、和室がどのように作られたのかを歴史的に見ていくような文章を書いています。

その中に、私がずいぶん前に調査をした千里ニュータウンの友達の家の話があります。これは千里ニュータウンのちょっと懐かしい情景です。

実は、私は千里ニュータウンの住人になり損ねたのです。父は医者だったのですが、私が小さい時、父にニュータウンの医者村で開業しないかというお誘いがありました。父はとて悩んで結局、大阪市内の長屋がたくさん残る町で開業することにしました。私はそのことを高校生ぐらいまで残念なことしたよなって思っていました。父が千里ニュータウンで開業すると言ってくれたら、近隣センターの隣の医者村にある小綺麗な戸建住宅に住んでいたのに、とずっと思っていました。

千里ニュータウンに住み損ねたので、自分の世代の人たちが千里ニュータウンでどのように住んでいたのかを研究したのが、この内容です。高校生の時の名簿を見て千里に住んでいる友達に片っ端から連絡して取材をさせていただきました。そのうちの1つの住宅がこ

●『和室学：世界で日本にしかない空間』松村秀一・服部岑生編 平凡社 2020
→ 岡絵理子さんからのご紹介

れにあたります。

新千里南町のけっこう大きな 100 坪ある敷地。そこにとても立派な邸宅というかコンクリートの 2 階建の家が建っていて、池には鯉が泳いでいました。その家を建てる時に、どんなことを考えていたかを尋ねたのです。1 階には八畳間と四畳という、一応続き間の座敷があり、会社の社長をしていたお父さんが床の間の前に座り、社員が新年の挨拶に来るのです。お節料理を用意して出迎えたそうです。

2 階には、子ども部屋や寝室に加えて和室が一間あり、お父さん方のおばあさんが「息子が建てるうちは私のうち、私の部屋を作って欲しい」と言われたとか。そういうエピソードを平面図を交えて書いています。日常的にはどのように暮らしていたか、お正月には、あるいは親戚が集まったときには、とそういう時の家の使われ方が書かれているので、その頃の千里ニュータウンの戸建住宅をご存じの方は、「そういうのあったよね」と、ちょっとなつかしく思われるかもわかりません。

この本には載っていない話で恐縮ですが、私の世代は、千里ニュータウンで生まれ育ったわけではなく、小学生になってから戸建住宅地に引っ越してきた人が多いのです。その人たちが戸建住宅を建てる時には、1 階に台所と居間があり、2 階に子ども部屋が典型的でした。そんな千里ニュータウンの戸建住宅に、子どもたちがいなくなった後、一体どうなっているのかという調査もしました。子どもたちが独立などして出ていった後、男の子の部屋はお母さんの衣装部屋になっています。しかし、女の子の部屋はそのままにしています。いつ帰ってきてもいいよというふうに。リビングルームに注目すると、女の子が嫁に行くなどして出て行った家では、ダイニングテーブルがどんどん大きくなるんです。通常は夫婦 2 人しか住んでないのに、休日になると娘が旦那さんと子どもたちを連れて実家に戻ってくるので、その時のためにテーブルが大きくなります。そこが自分たち一族のふるさとの家になるんだと、皆信じていたんですね。

でも、それから年月が経ち、実際どうなったかという、さきほどの家はみんなが戻ってくる実家になることなく売られてしまいました。お父さんが亡くなり、残ったお母さんは娘が住む東京に行ってしまいました。この家では、二世帯で住むことを想定して、2 階に台所を作れるように水道配管を 2 階に上げていたり、いろいろ準備されていたのですが、結局誰も住まなくなって売られて、家が潰され、新しい方が家を建てて住んでおられます。千里ニュータウンの戸建住宅は、ふるさとの家、実家にはならなかったということはこの本には書いています。他にも、集合住宅の標準設計「51C 型」のことも取り上げていますので、和室とニュータウンの暮らしに興味ある方は手に取っていただけたらと思います。

奥居

ありがとうございました。それでは最後に田中さん、よろしくお願ひします。

田中

千里文化センター「コラボ」の田中と申します。私をご紹介するのは、『ぶらり千里』という冊子です。千里ニュータウンらしい本やなあと思ってます。56 ページのけっこうしっかりした冊子になっています。

●『ぶらり千里』
豊中市千里文化センター
市民実行委員会 2015
→ 田中直之さんからのご紹介

これは「千里文化センター市民実行委員会」という、市民の方が住民自治をめざして組織された団体の中の広報プロジェクトが編集されたものです。ニュータウンをどんどん紹介していきましょう。「魅力発見ガイドブック」とサブタイトルが付いています。市民の方と行政が一緒になって作った仕立てでございます。

そもそも「コラボ」とは、千里中央にある豊中市の複合公共施設で、市民活動や市民の交流の場として、またそういった拠点として整備されています。組織のミッションとしては、地域のにぎわい創出と課題解消に向けた取り組みを進める仕事をしております。

『ぶらり千里』の中身は、豊中市が発行しているので、豊中市にある4つの住区と上新田を中心としたエリアの魅力を紹介していく内容です。まちあるきのガイドブックとしても活用できるようになっており、吹田地域も入れました。おすすめのコースも載せています。

けっこうボリュームがあり、魅力を紹介するのみならずニュータウンの近隣住区理論の簡単な説明や団地の配置の違いなども載っていたり、読み物としても勉強になるような冊子になっています。

私のオススメとしては、皆さん千里中央にセルシー広場があったのはご存じだと思いますが、新人歌手の登竜門みたいな感じであそこに出れば売れるで！という広場がありました。セルシー広場のイベントの歴史ということで、あんな人やこんな人も出てたんだねという面白いリストも出ています。ニュータウンの年表もでございます。

2015年（平成27年）に初版。2019年（平成31年）に3版。実は売り切れて絶版になっています。これは初版の表紙。よく見てくださいね。何かが違います。これは3版の表紙。わかりますか？初版のイラストではタワーマンションが1本ありましたが、3版には2本目も書き加えられている。絶版となってしまう、残念ながら紙でお手に取っていただくことはできないのですが、市のホームページから pdf で取り出し可能ですのでぜひご覧いただきたいと思います。

(<https://www.city.toyonaka.osaka.jp/machi/senrikorabo/ayumi/a0010400000202106.html>)

PR 的になりますが、私たちコラボのホームページには、千里文化センターフォーラムという千里のまちづくりや市民活動などに焦点を当てたフォーラムを開催した記録も収録しております。コラボは今年で15周年を迎えますが、10周年の時に浜村淳さんに記念講演をいただいたり、3年前には地域情報誌の可能性を探る楽しい記録も残っております。ぜひご覧いただいて楽しんでいただけたらと思います。

(<https://www.city.toyonaka.osaka.jp/machi/senrikorabo/ayumi/10517144532448.html>)

奥居

ありがとうございました。千里の皆さんはご存じだと思いますが、曾谷さんがお勤めの千里ニュータウン情報館は吹田市の施設、田中さんのコラボは豊中の施設ということで、両市からご紹介をいただきました。千里中央は豊中市、南千里・北千里は吹田市ということで千里ニュータウンはまたがっている。交流しながら、町は回っています。どうも、ありがとうございました。

今回は「ニュータウンを読む」ということで本を選んできました。いろいろな切り口があって、絵本があったり、暮らし方の変化、まちあるきのイドブック、歴史の伝統だったり。選ぶのが難しいほどたくさんありました。

千里ニュータウンは「まちびらき」から60年。60年前にニュータウンがどうして作られたか田園都市まで遡ると、すごく裾野が広くてこれだけでお腹がいっぱいになります。

『ぶらり千里』の表紙が初版から3版でタワーマンションが追加されているのは、きょう初めて気がつきました。私の手元にあるのはタワーマンションが2本の3版ですね。

ここからはまた順番にお話を掘り下げたいと思います。最初にご紹介いただいた曾谷さんの『千里の歴史と伝統』。1982年に1冊目が、千里ニュータウン20周年の時ですね。今から40年前。千里も成人になったので、千里ニュータウンが開発される前にどんな物語や歴史があったのかを大阪府の外郭団体である千里センターが、千里20周年事業の中で紹介をされた。曾谷さん、なかなか渋い本を選ばれたと思ったんですが、どういうところが読みどころでしょうか？

曾谷

定年再任用で情報館に来てるんですが、現役の時はバタバタと仕事をしていて。ありがたいことにニュータウン育ち。人にニュータウンのことを紹介する時に、この本はすごく参考になって。過去には行政がこういうものを定期的に発行してたんだなあ。

すごく面白い中身です。人に紹介する前に自分自身で読んで、すごく素敵な話がいっぱいあって気に入ってるので出してみたかったんです。

奥居

ありがとうございます。多摩ニュータウンからご紹介いただいた『やとのいえ』と続いてご紹介しましたが、大規模開発で荒々しく里山を近代都市に変える一方で、その前にどういった歴史があったのかをきちんと拾い集めて本にしている。そこに開発者の良心といいますか、この土地に対する思いみたいなことを感じられて、けっこう良い時代だったんだという気がしました。

編集者の北田さんは民間の方ですが、大阪府と仕事をして、千里の町がどんなふうにも人の暮らす歴史ある町になっていくかをすごく丁寧に編集をされた。大阪府も千里センターという住民サービスの組織を作って新聞『千里』というフリーペーパーを2005年まで出し続けてきた。曾谷さん、情報館に新聞『千里』は揃っていますね。

曾谷

そうですね。新聞『千里』全部揃ってます。あと『千里タイムズ』と廃刊になった『ニュータウン』。3つの地域新聞が揃っています。

奥居

全部読むと面白いですね。新聞『千里』は行政側のオフィシャルな情報。その中に千里丘陵には昔マムシが6万匹いたんだという話も。『千里タイムズ』は民間側から、これでいいのか千里ニュータウンという市民側の目線で編集されている。この2つを読み比べると、当時の千里のエネルギーがわかります。

ニュータウンができる前にも暮らしがあったんだという『千里の歴史と伝統』と『やとのいえ』。表現方法はまったく違いますが、視点は共通していると思います。仙仁さん、『やと

のいえ』は企画にも関わられたんですね？

仙仁

多摩丘陵を舞台にして歴史の流れを描いて、かなり固まった状態で私のところに来たので、あんまり根本的なところには関わってなくて。絵の部分を中心に監修しました。

奥居

さきほど聞いていて気づいたのですが、「やと（谷戸）」は「や」が高くて「と」が低い頭高アクセントなんですね。「や」が低くて「と」が上がる平板アクセントだと思ってました。

仙仁

「や」が高くて「と」が低いアクセントですね。

奥居

仙仁さんのバーチャル背景も谷戸ですか？

仙仁

はい。ここは公式な地名ではないですが「狼谷戸（おおかみやと）」です。

奥居

多摩ニュータウンは、ニュータウンの内外に昔の面影を残すような区域が入り組んでいるのが面白いですね。

仙仁

そうですね。多摩丘陵からちょっと出ると昔の風景が残っている所がありますね。

奥居

千里も最初の頃は、ニュータウンから一歩出ると農村風景でしたが、今は周りが住宅地になって昔の面影が全然ないとは言わないですけど減ってきてしまいました。多摩のほうはまだ残っている感じがします。

仙仁

多摩ニュータウンがこの場所にできた理由が、ある程度まとまった、市街地化されていない土地があったということなんです。その理由を遡ると、都心からの距離があったと思うんです。今でも交通の便が悪い所を中心に、谷戸の風景が残っているのかなと思います。

奥居

ニュータウンで育った人間がそういう景色を壊さないでほしいと言うのは、すごく矛盾していると承知のうえで言うんですけど、そういう景色が残ってほしいですね。僕も子どもの頃、ニュータウンの端っこの周辺緑地の切り通しを一步外に出ると、100年ぐらい景色

が戻ったみたいな感じの所がありました。このままでいてほしいなと思っていたけど10年ぐらい前になくなっちゃいました。

仙仁

私は植物が専門なので、その点でも開発されていないエリアがなくなってしまうと困るのは正直ありますね。ただ、開発されてない所が昔のままかというとは実はけっこう農業も大きく変わってしまっていて。今、見えている開発されていないエリアの風景は、50年前とはずいぶん変質してしまっているんですね。同じ農業をしても、風景として変わっているんです。そういう意味で、変わってない所ですら変わってしまっていたりする。残ってほしいという気持ちはありますが、変わってしまうのがあたりまえというか。悩ましいですね。

奥居

変わらない所はないというか。ニュータウンの外が昔のままだというのは、イリュージョンでしかないんですね。

仙仁

そうですね。気づかないけれど、明らかに変わってますね。

奥居

仙仁さんは植物に詳しくて、千里に来られてご案内した時も次々に道端の、私は草木は全然わからないので草と木としか言えないんですが、初めての土地なのに「これはなんとかですね」と名前をどんどん言われるんです。楽しいというかすごいというか。僕も草木の名前に詳しくなりたと思いました。

『やとのいえ』は150年の歴史と、この1冊で四季も表現されていますね。

仙仁

ページが進むごとに時代が進み季節が進むようになっていて。たとえば夏を描いた年はそれ以外の季節を描けなかったりするんで、それがもったいなくはあったんですが。

奥居

千里コラボ4階の図書館にもあります。多摩丘陵が舞台ですが、千里の話として読み替えても同じようなストーリーがあったんだろうなと身につまされるというか、親近感を覚える絵本です。大人も子どもも楽しめる本だと思います。

続いては岡先生からご紹介いただいた『和室学』。和室と千里ニュータウンは意外な組み合わせのようでいて、その中に暮らしの変化が端的に表れるというか。子どもが独立後の部屋の変化は面白い話だなと思いました。

和室に関心を持たれたのは、暮らしの変化が端的に出るからなのではないでしょうか。

岡

1960年代、1970年代に戸建住宅を持ちたいという人は、やっぱり和室を持ちたかったの

です。和室で親戚が集まるとか、和室でお葬式するとか。「自分のうちでお葬式をするために戸建住宅がいる」と考えていた人もいます。田舎の実家でやっていた暮らしを千里ニュータウンで実現しようという思いで戸建住宅を造った人がけっこういらっしゃるんです。

そういう戸建の和室と、団地にある和室はまったく意味が違っていています。千里ニュータウン1代目の団地には必ず和室があるんですけど、団地の標準型と言われる「51C」設計に関わった鈴木成文先生は「畳の部屋は仕上材」と書いてあるんですね。畳は仕上材です。和室を作ろうと思ったのではないわけです。

今はすっかりなくなっていますが、和室が欲しくて戸建住宅を作ろうという気持ちがあったようです。そうすると、自分の作った家も実家のように子供達が戻ってくる家になると思っていたようです。私が学生の頃は、研究室で「千里ニュータウンはふるさとになるのか？」という問いかけをしていました。千里ニュータウンはグリーンベルトがあるにもかかわらず、外へ外へと広がっていき、周りにも戸建住宅がどんどん建っていきました。この時代の戸建住宅を欲しいという人たちの気持ちはいったい何だったのかというところに興味があって研究をしていました。

千里ニュータウンの戸建住宅は、その後に作られたもっと郊外の住宅地と比べると、比較的平たいのです。それでも、高低差があって、掘り込みの駐車場や、石垣を作って家の高級感を出しています。その景色を残したいという話も景観の中では出てきます。敷地の地盤面を変えないでほしいと。地盤面を変えて家を造ると全然違う景色になるので、建替時にはそういうことをしないでほしいという話題が出てきています。今の千里の戸建住宅地はすっかり高級住宅街になってしまっていますが、そうなった理由が和室にあるんだろうなと思っていたんです。

今、新しい住宅地に家を持つと思っている人たちとは違って、その頃は田舎、実家から出てきた1代目の人たちなので、ふるさとの家や昔の農家のような家を引きずっていられると思っていたんです。みんな、そういう家でしたね。

奥居

私は親に連れられて来たので2代目になりますけど、親世代は田舎でしていたような暮らしを都会で再現したかった。それが家の作り方に表れると。

うちは母親がモダンな人だったので、1回作って建て替える時に「和室いらんやない？」と父親に言って、父親が「和室がない家なんてあるか！」とすごい怒ったのを覚えています。まさに岡先生が言ったような「和室がない家は家じゃない」という。父は大正生まれでしたから、当時の感覚だったのかな。母は港町で育ったモダンな人だったので、「畳なんやないやない？」と。そこでせめぎ合っていたのかな。

和室で連想して思い出したのは、門の所に戸建てだと見越しの松を植えている家が多い。立派なお屋敷を作りたいという。千里ニュータウンは新しい住宅地なのに、門の所は見越しの松という。

多摩ニュータウンと比べると千里は戸建の比率が高いんですね。1960年代に流行った造り方の家が多いです。建物が建て替わっても持ち主が一緒であればそんなに極端に構えは変わらないけど、最近だと売り払われて敷地分割されて別の持ち主になると、石垣は切り崩されカーポートを2台分作っちゃうとか。そうすると1代目からだいぶ違う景色になって

いくなあと。多摩ニュータウンの八王子市側には新しい戸建の区画がありますが、あの景色に近づいていくのかなという感じがします。

きょう多摩ニュータウンからご参加いただいている高野さんは、多摩ニュータウンをふるさとと思い、ニュータウンで育って一度外に出て、また帰ってきた方です。

ニュータウンとふるさと意識と家の構え方という関係を調べてみると、いろんな物語が浮かび上がってきますね。

岡

ふるさと意識の対象って家じゃなかったようです。さらにいろいろ調べていると、千里ニュータウンで育った若い世代の人たちって千里ニュータウンそのものが好きなんですよね。千里ニュータウンそのものがふるさとという。家とか親じゃなくて。

奥居

家じゃなくて公園とか。

岡

そうそう。公園や団地内の敷地など、そういうのをなくさないでと思っていますね。

奥居

だから公園ってすごく大切なんですよね。

岡

そうですね。「ニュータウンがふるさとになるか」は永遠の課題かなと思っています。

奥居

ふるさとだと思っているんだけど、ふるさと意識の持ち方が和室じゃないということですね。別のところに自分の原風景を持っているということなのかな。多摩ニュータウンはもう少し世代が下がるので、また違うのかもしれませんが。

それでは最後に、豊中市の田中さんからご紹介いただいた『ぶらり千里』。分厚いパンフレットというのがちょうどいい表現だと思いますが、表紙も入れると 56 ページもあるんですね。すごい充実ぶり。

町のオススメスポット紹介や、ウォーキングコース、年表もあるし、上新田という旧集落のお祭りの紹介があったり、すごくいろんな角度で紹介されている。少し残念なのは、豊中市で作っているのに豊中市エリアだけクローズアップしているところ。吹田側も一緒にやるともっといいのになあと思ったりしますが。

3 版まで作られていますが、追加はないんでしょうか？

田中

費用的なものが… (笑)。聞くとところによると 8 年前に出版されたんですが、2 年ほど時間をかけて取材して市民の方と一緒に作ったんだと。私がコラボに来たのは 7 年前なので、

編集作業に関わりたかったんですが、残念だったなど見返しています。なかなかの力作、労作やなと思います。

奥居

ほんとにそうですね。骨格がしっかりしているので、中をリニューアルしていけば費用の問題さえクリアすればまた続けていければいいなと思います。まちあるきのコースも、パノラマコースやプチトレッキングコース、ひめぼたるコース、モーニングヘルシーコースと凝っています。

田中

吹田に出ていくコースもありますね。吹田の町の紹介はないけど、散歩コースとしての紹介は少しだけありますので吹田市の方もご覧いただけるとうれしいと思います。

奥居

『ぶらり千里』はウェブでも見られます。

(<https://www.city.toyonaka.osaka.jp/machi/senrikorabo/ayumi/a0010400000202106.html>)

ありがとうございました。

その他の資料紹介

奥居

ここからはパネラー以外の参加者でこんな本を紹介したいというお声があればご発言いただけたらと思います。申し込み時に多摩ニュータウンの高野さんがご紹介したい本があるということなので、お願いします。

高野(参加者)

はい。『日本住宅公団史』。日本住宅公団が1981年に住宅・都市整備公団に変わった時に、住宅公団の歴史をまとめた本です。非常によく全国各地のニュータウン、団地の歴史がまとまっています。何かを調べていて手がかりがないかなと思った時に『日本住宅公団史』にヒントがあることがありまして、取り上げさせていただきました。

後年の新しいニュータウンの情報については『住宅・都市整備公団10年のあゆみ』(1991年)。同様に公団がまとめた資料がすごく参考になります。多摩からの参加で、全国のニュータウンがまとまっているこの2冊をご紹介します。

●『日本住宅公団史』日本住宅公団 1981
『住宅・都市整備公団10年のあゆみ』住宅・都市整備公団 1991
→ 高野さんからのご紹介

奥居

ありがとうございます。多摩ニュータウンは、住宅公団と東京都の役割がすごく大きい町ですね。千里ニュータウンも住宅公団、URの団地がたくさんありますが、URの出版物に

千里ニュータウンはあんまり出てこないんですよ。大阪府と住宅公団はライバルだったので、必ず公団・URのニュータウンの話は高蔵寺から始まって多摩ニュータウンから港北に流れていきます。ライバルが仕切っていた町を取り上げにくいのかな。

言い換えると、千里の歴史の裏側で公団の開発が進んでいたということになるので、両方をカバーするとニュータウンの重要なところが。大阪府とURの両方を見ていくとよくわかる関係になっていると思います。

ちなみに、大阪府は『千里ニュータウンの建設』というこんなごつい本を、1970年、ちょうど千里ニュータウン開発がひとしきり終わった時にまとめているんです。腕が重くなるような大型本で、個人で持っている人はそんなにいないと思います。千里の図書館や情報館にはあります。曾谷さん、この本も紹介しようと思っておられたと。

曾谷

きょうも情報館のお客さんがその本を見てびっくりしておられました。大阪府が出した究極の1冊だと思います。

奥居

千里ニュータウンの構想から計画、実施、完成に至るまで載っている。どこにでもある本ではないですが、図書館で探していただくと千里以外でも見るチャンスはあるでしょう。

その他、きょうの機会に千里の本について語ってみたいという方いらっしゃれば、ぜひご発言をいただきたいと思います。

今回の企画は、千里ニュータウン情報館でいろんなニュータウンの本を集めていて、いろんな研究室や解散したNPO、個人研究者の書斎から集めてきた図書も運び込んで、かなり充実してきていますがなかなか一般の人の目にとまることがないんですね。見えるようにはしているんですけど、気がついていただく機会が少ないので、興味を持って手に取っていただければという狙いもあり、ニュータウンの本をあらためて読んでみよう企画しました。

曾谷さん、情報館にある本で人気のあるものはありますか？資料やパンフレットでもいいです。

曾谷

ガラスケースの中に、セルシーの昔のパンフレットとかそっち系が珍しいので。ある程度の書籍は最近いろんなかたちで手に入るようですが、今回の企画で気づいたのはガラスケースの中の何気ないパンフレットですね。観客の方の食いつきがいいなと思ってます。

奥居

情報館の展示をご覧になっていない方のために説明しますと、ガラスケースが2つありまして、1つのケースには、ニュータウンを最初に開発して戸建などを分譲した当時のパンフレットを入れています。千里ニュータウンに家を買いたいという人のために作られたパンフレットで、当時の分譲価格や間取りがわかります。

もうひとつのガラスケースには、千里ニュータウンの中で60年間に配布されたいろんな

商業施設、千里ではセルシーが有名ですが、セルシーのパンフレットや万博関係のパンフレット。千里 20 周年 30 周年 50 周年の周年事業のパンフレットだったり。パンフレットって意外と面白いんですね、時代性が出ていて。ケースの中に入れてと手に取って読めなくなっちゃうんですが、見ていただきたいのでガラスケースに入れてあります。

曾谷

4 月末で閉館してしまう千里中央の大丸ピーコックの建物。その昔のパスが手書きなんですね。そのパスの下にアルファベットで「TSUJIMOTO」と署名が入っています。このデザイン事務所は今でも手書きを売りにしているんだよと来館者が教えてくれました。今は CG の時代でも手書きでやっておられるそうです。

奥居

CG がなかった時代は完成予想のスケッチがパンフレットに多く出てきますが、そこは今でもスケッチにこだわってやっていると。

曾谷

そうみたいです。教えてくれたのは建築のパスをやってる方でした。いつか TSUJIMOTO さんに連絡して、「千里中央の大丸がもうすぐ閉店しますが、そのパスはまだ事務所にあるんですか？」と聞いてみたいなあ。

奥居

ぜひ。今の話題に出ました千里中央の大丸ピーコックは、ピーコックのちょっと上級バージョンなお店で 1970 年に開店。4 月 30 日で 53 年の歴史に幕を下ろして閉店になります。その後がどうなるかはまだわかりません。

ここが有名になったのは 1973 年のトイレットペーパー騒動。このピーコックから全国に広がったというのが 1 つの説になっています。1 つのスーパーが閉店する時に必ずトイレットペーパー騒動と関連づけて語られる、すごく特殊な話だなと思います。2 月 26 日の産経新聞でも大きな記事になっていましたね。なぜトイレットペーパー騒動が千里から広がったのかは、突っ込んでいくネタになるところですね。

松浦(参加者)

そうですね。トイレットペーパー騒動から今年で 50 周年ということで、今年の 11 月 1 日にはトイレットペーパーを両手に持ちきれないほど抱えて買って帰ろうと思ってたんですけど、それが実現できなくなるので大変寂しく思ってます。

奥居

パニックを起こした反省の色がないというか。

松浦(参加者)

(笑)

奥居

今年でちょうど 50 周年なんですね。騒動が起きた最初の日は、10 月 30 日という説もあるし 10 月 31 日という説、11 月 1 日だったという説もある。何日かかけて千里の中で広がって行って、そこから全国に飛び火したと言われてますね。千里を時代を先取りする、そんなことで先取りしていいのかという感じですが。

大阪人としてはネタになったことで、また掘り返して話題作りをできるといいなと思いますが。トイレトペーパーを持って皆で走るみたいな（笑）。そんなことができると面白いですよ。

ちなみに松浦さんは千里の建造物のいろんな模型を作られていますが、順調ですか？

松浦(参加者)

何年か前にエキスポタワーの模型はできました。

奥居

ものすごく精巧な模型で、家から出せないほどの大きな。

松浦(参加者)

今は千里中央公園の展望台の模型を作ってます。まだ全然進んでない。図面が手に入らず、自分で写真を撮りまくったり。幸いにして現物が残ってますので、現場に行ってみたり。それでわかったんですが、L 字型の脚がありますが完全な L じゃないんですね。ちょっとすぼまってる。そういう発見があったり。

真鍮のハンダ付けで作ってます。エキスポタワーに合わせて 140 分の 1。屋根の部分に縦に細い板が貼ってありますが、実際の本数と同じ数で作ってます。完成させたいですね早く。

奥居

すごい。これはぜひとも完成を。完成するとどれぐらいの大きさに？

松浦(参加者)

これは高さが 15m ぐらいなので、140 分の 1 で 10cm ちょっとぐらいですかね。

奥居

アクリルケースに収めて展示できますね。楽しみにしたいと思います。松浦さんはカメラマンなんですが、模型マニアでありニュータウンマニア。ニュータウンでなくなりそうな建物などがあると、松浦さんに通報することになっています。図面がなくても、写真を撮って模型を作られる。図面がないのに模型を作るのは大変ですよ。

松浦(参加者)

模型作りの 3 分の 2 の時間はほとんどそっちに取られますね。寸法計算ができてしまうと、あとはそれをどう作ればいいのかだけの話ですので。実際の寸法を割り出して、それに矛

盾がないかどうか検証するのが一番面倒な段階ですね。

奥居

楽しみです。多摩ニュータウンでは最近、町の「航空斜め写真」をずっと撮り続けていきたいとクラウドファンディングをされて、すごく盛り上がりましたね。

仙仁

おかげさまで無事に成功して、本当にありがとうございます。

奥居

目標額をはるかに超える。最初の目標を突破して2回目3回目の目標も突破。みんなで町の航空斜め写真を撮り続けられるようにしよう。定点観測のプロジェクトもされていて、どうしていくかという方法論があるんですよね。

仙仁

ベースになっているのはURが残された写真です。それが今どうなっているのかを市民の有志で「定点撮影プロジェクト」というメンバーでやっています。けっこう皆さんプロフェッショナルで、場所を特定するのも、設計とかしてらっしゃる関係で、ものすごく綿密に検証して「この位置、この角度で撮った」と。なかなか本格的で、元の写真に乗り物が写っていると、来るまで待つて撮ったり。

奥居

パルテノン多摩は出版活動も活発にされていて、写真集も何冊か出していますね。

仙仁

そうですね。やっぱり写真集は一番の売れ筋ですね。風景と斜め航空写真は写っているものが違うんですけど、それぞれに違う楽しさがあるという感じですかね。自分自身も好きで買うほうなのでわかります。逆に千里ニュータウンはないんですか？

奥居

航空写真は、大阪ガスの系列会社がずっと撮っておられますね。

(豊中市)

そうですね。大ガスエナジーさんが千里中央駅周辺の航空写真を撮られているので、写真展開催の時とかはお借りしています。千里中央がメインですが、町並みも写っています。

奥居

多摩ニュータウンほど徹底して細かく撮っているのは、千里では知らないですね。ニュータウンは空から見ても楽しい。空から見たくなる町だなというのが、クラウドファンディングの盛り上がりにもなったのかなと思います。クラウドファンディングで次の写真集が出

るのを楽しみにしています。

仙仁

ぜひ楽しみにしてください。4月以降に撮影予定です。

奥居

多摩ニュータウンで、多摩ニュータウン関係の資料や本を手に取りやすいかたちで集まっているところは、パルテノン多摩でしょうか？

仙仁

いえ、URの書籍を一番寄贈を受けているのが、多摩市立図書館なんです。多摩中央公園という大きい公園の一角にあります。その公園の片隅に新館ができる予定になっていて7月にオープンする予定です。ニュータウン資料も整理されたものが見られると思います。たぶん多摩ニュータウンだけじゃなく、URのいろんな資料もあるはずなので、参考になると思います。パルテノン多摩からはすぐ近くです。

奥居

完成したら行きたいですね。今後も千里と多摩で情報交換をしていければと思いますし、多摩の皆さんも千里にお越しいただいて、情報館やコラボをご案内できたらと思います。

ニュータウンの魅力とは

奥居

あっという間に時間がたってしまい終わるのが惜しい気持ちですが、最後に4名のパネラーの皆様一言ずつ「ニュータウンの魅力って何だろう」というお言葉をいただけるとありがたいです。

曾谷

千里ニュータウンはいつまでもまちづくりのトップランナー。その一言だと思います。

仙仁

自然にできた町と違うのは、人がプランしたことである意味、理想を形にしようというのが表れているのがニュータウンだと思います。そういう人々が持っている理想の形を見れるのが魅力かなと思います。

岡

オープンスペースですね。1つは公園ですが、公園以上に素敵なのが団地の敷地です。丘陵地に建っている住棟のハコが埋まったり、ちょっと浮いてたりする青山台のUR団地が大好きです。イチオシです。

田中

人の繋がりですね。まちが庭のような感じの良い雰囲気の中で人の繋がりを深めながら新しい生活を作っていくという意味で、モダンライフの先進だなと感じています。いわば「千里スタイル」ですね。

奥居

どうもありがとうございました。本当に楽しい時間になりました。きょうは遅い時間からのご参加ありがとうございました。4名のパネラーに拍手をお願いします。お疲れ様でした。

ただいま南千里駅前の吹田市立千里ニュータウン情報館では「ニュータウンを読む」企画展示を3月26日（日）まで行っています。まだご覧になっていない方はぜひともお越しただければと思います。千里ニュータウンや多摩ニュータウン、その他のニュータウン、そのルーツである田園都市などに関する「読む」資料を集めています。実際に手にとって読んでいただけます。月曜日は休館になっています。

きょうと同様のニュータウン本大会はもう1回あります。3月22日に同じ時間です。また別の資料をご紹介します予定ですので、関心のある方は次回もお申し込みください。

吹田市立千里ニュータウン情報館や、南千里・北千里・千里中央にある吹田市と豊中市の図書館でもニュータウンに関する資料を多数集めています。地元ならではの情報もあるかもしれません。あると思います。機会がある時に足を運んでいただいて、手にとって理解を深められるとまた面白いんじゃないかと思います。ただし、千里ニュータウン情報館では貸出はしておりませんので、その場でお読みいただくというかたちになっています。

「知れば知るほど面白くなるニュータウン」いかがだったでしょうか。これを機会にニュータウンを歩いてみたり、ニュータウンに関する本を調べてみたり、千里の方が多摩に行ったり、多摩の方は千里に来られたり、そういう機会が増えると楽しくなっていくんじゃないかなと思います。本当に長い時間ありがとうございました。

主催：吹田市立千里ニュータウン情報館
運営企画：一般財団法人 千里パブリックデザイン
後援：吹田市・豊中市千里ニュータウン連絡会議
文字起こし：AKIRA text create 山本品

「ニュータウンを読む」展展示ブックリスト

2023年2月7日～3日26日

吹田市立千里ニュータウン情報館

- ・千里ニュータウンを中心に、ニュータウン、都市開発全般からも選んでいます。
- ・これらの資料は、今回の展示のために収集し、常時「千里ニュータウン情報館」にないものも含まれています（「千里ニュータウン情報館」では貸出は行っていません）。
- ・一方で、千里ニュータウンやニュータウンに関する「読む資料」は、はてしなく大量にあり、ここに挙げたのは、ごくごく一部です！
- ・「吹田市立千里ニュータウン情報館」「吹田市立千里図書館」「吹田市立北千里図書館」「豊中市立千里図書館」などに多数所蔵がありますので、ぜひとも探索して、「わたしたちの町」ニュータウンへの関心を広げてください！

1. 『明日の田園都市』エベネザー・ハワード 1898
2. 『近隣住区論』クラレンス・A・ペリー 1929
3. 『ちいさいおうち』バージニア・リー・バートン 1942
4. 『千里ニュータウンの建設』大阪府 1970
5. 『華麗なる一族』山崎豊子 1970～72
6. 『すべてころんで』田辺聖子 1972
7. 『千里ニュータウン 人と生活』大阪府千里センター 1973
8. 『千里ニュータウンの研究』片寄俊秀 1979
9. 『羊をめぐる冒険』村上春樹 1982
10. 『千里の歴史と伝統』千里20年まつり実行委員会 1982
11. 『千里ぐらし』梅棹忠夫 1990
12. 『水曜の朝、午前三時』蓮見圭一 2001
13. 『新しき故郷』山地英雄 2002
14. 『住まいと家族をめぐる物語』西川祐子 2004
15. 『ニュータウン再生』山本茂 2009
16. 『海に沈んだ町』三崎亜記 2011
17. 『しろいろの街の、その骨の体温の』村田沙耶香 2012
18. 『団地図解』篠沢健太、吉永健一 2017
19. 『季刊民族学 161「千里から考えるニュータウンとそのゆくえ」』千里文化財団 2017
20. 『ニュータウン誕生』パルテノン多摩、吹田市立博物館 2018
21. 『ここじゃない世界に行きたかった』塩谷舞 2021

22. 『千里山タイムス』『千里タイムズ』千里タイムズ社 1962～
23. 『新聞千里』大阪府千里センター 1964～2005

以上